

Hokkaido University Institute for the Advancement of Higher Education

ニュースレター



北海道大学 高等教育推進機構

Newsletter No. 119

1 年生， 3 年生の自習時間

—「令和元年度授業アンケート」と

「2019年度学生アンケート」の結果より— (3 ページ)

特別講義「大学と社会—先輩からの熱いメッセージ—」

を開講—12人の卒業生が後輩に熱弁— (5 ページ)

経済同友会と連携した長期インターンシッププログラム

に参加した学生の成果発表会開催 (7 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

本学教育体制の新たな前進に向けて

高等教育推進機構長・理事・副学長 山口 淳二

皆様もご存じのように、本学では10月1日より寶金清博新総長の就任に伴い、新たな執行部が発足しました。私も教育を中心とした総括担当理事として高等教育推進機構長をあわせて務めることとなりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は、2001年に本学理学研究科（当時）に赴任する前は学部のない大学院に所属し、ほぼ研究に明け暮れる日々を過ごしていました。当時授業は、大学院に関係するものを少し行っていただけで、凡そ学部に関することには無縁でした。その後理学部の教務関係の仕事を手始めとして、2010年10月からの高

等教育推進機構副機構長・全学教育部長、翌年からは初代総合教育部長として総合入試で入学した1年生を対象とした学部・学科移行手続き、総長室役員補佐（現在の総長補佐）として北海道内国立大学間の教養教育単位互換協定の締結と遠隔授業の実施、また、2014年よりこの9月末まで副学長として新渡戸カレッジ副校長を務めました。

以上のような経歴を見ればわかるように、私は「教育の素人」としてごく常識的な目線で様々な対応を行ってきましたし、今後もその姿勢を大切にしたいと思っています。このタイトルをあえて「発展」や「改革」ではなく、「前進」としたのも、新理事として気負って何かを最初から始めるということではなく、本学の教育に関する現状を肯定しつつ、今後はそれをいかにより良い方向に進めていくか、という基本姿勢を示したかったからです。教育のアウトプットの一つを人材育成に求めるとすれば、今年日経新聞社が発表した「人事が評価する大学2021年度版」において、本学は見事1位に輝いたことなどはその証といえます。

とはいえ、教育に関する事業はどれもとても複雑です。従って、すぐに修正が必要なものだけでなく十分な実績を上げているものに対しても、本学の長期的戦略を見据えて新たに対応する必要もあると思っています。

教育の本質は、どういう人を育てるかを明確に示し、それを実施することにあります。その意味では、本学の「全人教育」の理念に基づいて、そして人材育成という視点から、まず全学教育やその後の学部後期や大学院生への教養教育（広い意味でのリベラルアーツ）の提供体制を再構築していく必要があります。これを含めた全体像については時間を要することなので、今後稿を改めて述べたいと思います。

私が大学全体の教育に関わって10年が経とうとしています。本学をとりまく国内外の状況も大きく様変わりしました。文部科学省からの運営費交付金が削減されていく中で、大学の特色・強みを活かした自律的な運営が求められています。これは、見方を変えれば、ミッションやKPIの達成に集中するだけでなく、ゲーム・チェンジャーとして新たな展開を導くことができるという意味でもあります。私を含めて皆様がそのような意志を持ち続けていくこ

とは重要なことと思っています。

さて、最後に喫緊の問題、ウィズコロナ、アフターコロナでの教育の在り方について記しましょう。本稿は11月中旬に作成していますが、現在北海道・札幌地域は第3波の感染拡大の最中です。本学でも学生、教職員に感染者が複数発生している状態で、現在その対応に追われています。振り返ってみれば、本学では第1波の感染拡大により3月の後期入試が中止となり、またその後今年度の授業の開始を約1か月遅らせ、1学期は基本オンライン授業での対応となりました。幸いにも北海道では第2波の拡大がなかったことから、7月から8月にかけて、一部で対面での授業・期末テストの実施や課外活動も再開させることができました。2学期については感染拡大防止の対策に基づいた対面授業の拡大を模索していますが、こちらについても今後の短期的実施計画さえ見通せない状態です。

この10か月で私たちは新型コロナウイルスとの付き合い方について随分と学びました。オンライン授業の実施については、教員も学生もその対応は一段落して、今後その質の改善や効率化についての検討が進むでしょう。感染防止対策を施した対面授業の実施体制も確立しつつあります。コロナ禍により、留学生の受入れや日本人学生の派遣といった移動を伴う活動については深刻な影響が出ています。しかし、国際交流でさえオンラインを取入れた授業形態の可能性を模索しつつあります。このような短期的な対応と並行して、来年度以降の対面とオンライン授業のバランスやその在り方についてしっかり検討し、実行していきたいと思っています。もちろん、このコロナ禍の影響を一番受けているのは学生さんたちです。健康面・メンタル面のケアも含めて学生の学修の状況把握、新たな教育体制の構築に努めてまいります。

引続き皆様のご協力をお願い申し上げます。

教育評価 EDUCATIONAL EVALUATION

1 年生，3 年生の自習時間

—「令和元年度授業アンケート」と「2019年度学生アンケート」の結果より—

本学では、学生の自習時間に関する2種類のアンケートを継続的に実施しています。1つ目は全学教育で実施している「授業アンケート」で、設問項目の中に授業1回当たりの自習時間をたずねる項目を設けています。2つ目は、総合IR室教学部門が実施している1年生と3年生を対象とした「学生アンケート」で、1週間当たりの自習時間をたずねる項目を設けています。単位の実質化の観点から教育改善の重要な評価項目であることから、この自習時間のアンケート結果に注目し、毎年本ニュースレターで報告しています。

「授業アンケート」は、平成30年度（2018年度、以後西暦表示。）2学期以降、紙媒体からスマートフォンあるいはPCにより回答するWebアンケート形式に変更しており、2019年度も引き続き、Webアンケート形式で実施しました。2018年度のみ1学期と2学期で形式が異なり、後述するように回答傾向に変化が生じたため、1学期と2学期をまとめて集計しました。また、本アンケートは全学教育担当教員へ年間最低1科目について実施するように依頼しています。しかし、Webアンケートは教員の指

示の有無に関わらず学生が回答を入力できるため、教員がアンケート実施を意図しない場合の回答も混在することが明らかとなりました。そのため、2019年度1学期以降のアンケート調査では、教員からのアンケート記入指示の有無をたずねる設問を設定して判別できるようにしましたが、残念ながら依然として結果の不一致があります。よって、Webアンケートである2018年度2学期、2019年度については、受講学生数の2割を超える入力があった場合のみを集計の対象としました。その結果、対象授業数は800を超え、回答数は延べ3万件ほどです。

設問では、「この授業1回（90分）のための予習・復習に費やした時間は平均（ ）であった。」とたずね、5つの選択肢（「4時間以上（4）」、「3時間（3）」、「2時間（2）」、「1時間（1）」、「30分以下（0.25）」）の中から回答してもらい、それぞれ括弧内の数値（単位：時間）に変換して平均自習時間を求めました。その結果、1学期は1.01時間、2学期は0.93時間、2019年度全体の平均は0.98時間でした。図1に2006年度からの平均自習時間の推移を示します。前年度全体の平均は1.18時間であったため12分

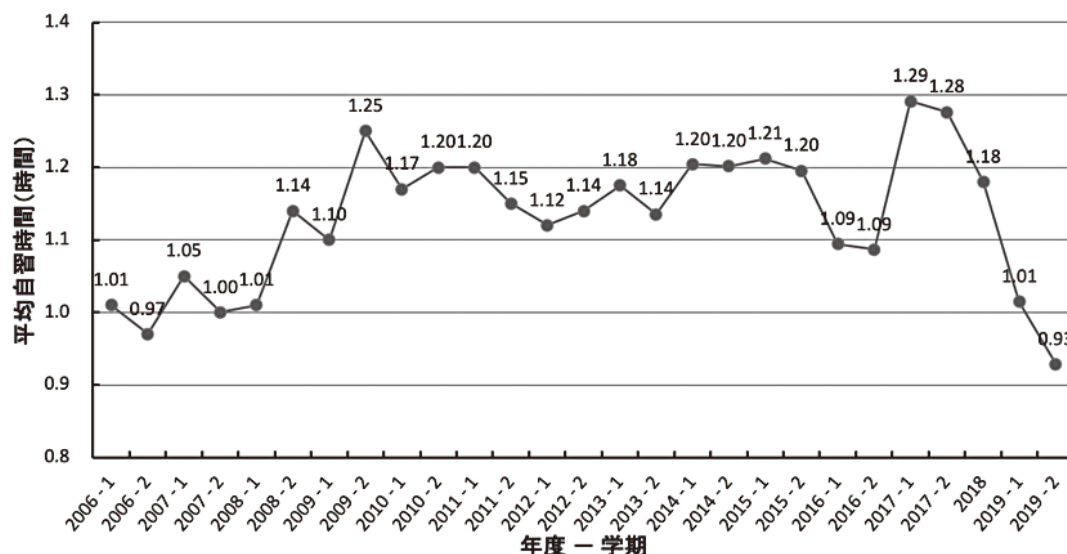


図1 授業1回当たりの自習時間の経年変化（授業アンケートより）

減となり、例年にない減少幅で、2006年度と同水準になりました。前回、本ニュースレター第115号の報告において、比較的変動が大きい2016年度2学期と2017年度1学期については方法の変更等の影響で結果を解釈することが難しいとしていましたが、今回は更に減少が大きくなりましたので、以下の学生アンケートの結果を用いて細かく分析します。

「学生アンケート」は毎年11月頃、「授業アンケート」同様にWebアンケート形式で実施し、回答を得ています。回答対象者は1年生、3年生の全学生ですが、近年の回答率は10%台前半から30%程度です。特に3年生については回収率が比較的低く10%前半で推移しています。

設問では、「授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする活動に1週間当たりどのくらいの時間を

費やしましたか」とたずね、8つの選択肢（「20時間以上(20)」、「16～20時間(18)」、「11～15時間(13)」、「6～10時間(8)」、「3～5時間(4)」、「1～2時間(1.5)」、「1時間未満(0.5)」、「全然ない(0)」の中から回答してもらい、それぞれ括弧内の数値(単位：時間)に変換して平均自習時間を求めました。図2にその結果を示します。1年生は7.9時間（前年度比：36分減）、3年生は7.3時間（同：30分増）となりました。1年生については、2015年度から2018年度まで直近4年間は8時間台となっていたが、7時間台へ戻ってしまいました。「授業アンケート」と同じ傾向です。3年生については、2016年度から2018年度まで直近3年間は減少傾向でしたが、下げ止まり、再び7時間台となりました。

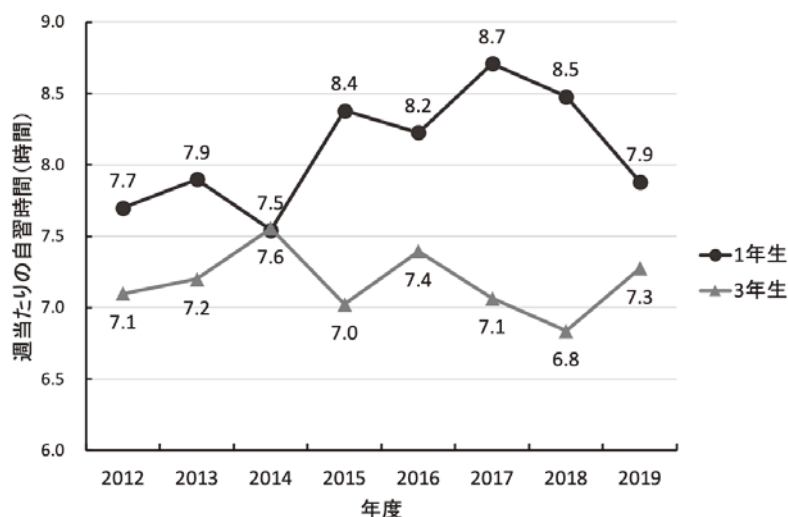


図2 1週間当たりの自習時間の経年変化（学生アンケートより）

「学生アンケート」については所属学部（1年生の総合入試入学者については、入試区分別）により文系、理系に分類できます。図3 a, bにその結果を示します。1年生について、文系は、直近3年間は減少傾向でしたが、下げ止まりました。理系は、2015年度から2018年度まで直近4年間は8.5から9.2時間と推移していましたが、2019年度は7.9時間と大きく減少しました。文系理系の差を見ると、理系に所属する学生の自習時間が文系に比べて長い傾向が続いています。3年生については、文系、理系ともに自習時間の減少傾向が止まり、文系理系の差は、1年生同様に理系が文系より自習時間が長い傾向は変わりませんでした。文系と理系の自習時間の

差については、本ニュースレター第112号の報告でも述べましたように、課題量の差のみに起因するものなのかどうかの精査は必要ですが、「学生アンケート」においては「授業時間外に、授業に関連しない勉強をする活動に1週間当たりどのくらいの時間を費やしましたか」とたずねていて、1年生文系は3.6時間（前年度比：1時間24分増）、1年生理系は2.6時間（同：24分増）と文系の方が長く、また、「授業時間外に、読書をする（漫画・雑誌を除く）活動に1週間当たりどのくらいの時間を費やしましたか」という設問には、1年生文系は2.5時間（前年度比：12分増）、1年生理系は1.7時間（同：30分減）と文系の方が長く、授業に関連する自習時間の差を

埋める結果となっています。このことから、文系は授業に出る時間、授業に関する自習時間が理系と比

較し短いですが、その分は授業とは異なった勉強や読書に時間を割いていると解釈することができます。

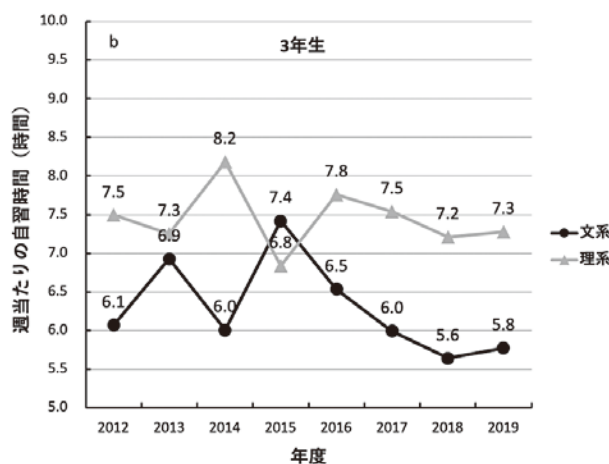
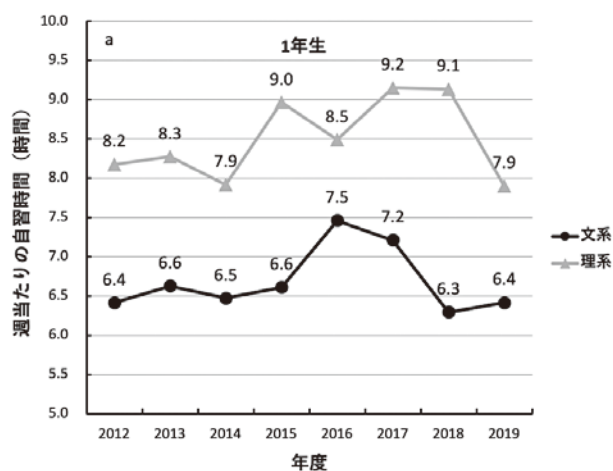


図3 文系／理系別1週間当たりの自習時間の経年変化 (a: 1年生, b: 3年生) (学生アンケートより)

近年、次世代的な教育方針として「STEAM教育」が注目を集めていますが、この「STEAM教育」は社会の課題解決のために探究的に学ぶことを目指しています。授業に関連する勉強をする活動、授業に関連しない勉強をする活動、そして読書が探究的に

学ぶことと同等であるかは様々な要因が複雑に絡むため容易に分析することは難しいですが、今の時代にこういった取組みが必要なのかは、大学や学部

の教育方針に沿って慎重に議論していくことが重要です。

(総合IR室 水谷 祐輔, 秦 敏宏)

学生支援 STUDENT SUPPORT

特別講義「大学と社会—先輩からの熱いメッセージ—」を開講 —12人の卒業生が後輩に熱弁—

全学教育の特別講義「大学と社会—先輩からの熱いメッセージ—」を開講しています。

本講義は、平成10年度より当時の中村陸男総長の発案により学部1年生を対象としたキャリア教育の一環として開講しています。様々な分野で活躍している本学の卒業生が後輩にあたる主に1年生を対象に、学生時代から現在までの体験談を中心にお話をいただき、受講生である学生は、これらの講義を通じて、大学生活のあり方や将来のキャリアについて考える能力を育成することを目的としています。

今年度は、新型コロナウイルスの感染防止の観点からオンラインでの同時配信方式により実施しました。従来の教室での対面の授業とは異なり先輩から

の熱意がどの程度伝わるか不安でしたが、例年以上に時間が足りなくなるほど学生から数多くの質問が出るなど充実した授業内容となりました。

また、2017年度から、新渡戸カレッジと共同で開講することとなり、今年度も講師として12名のうち4名は新渡戸カレッジのフェロー及びメンターにお願いをしました。

今年度は、1年生を中心に61名の学生が受講していますが、サブタイトルどおり、多くの方々が卒業生ならではの熱いメッセージを後輩たちに送っていただきました。

(亀野 淳)

表1 2020年度 「大学と社会」スケジュール

【秋ターム】	
①10月1日(木)	○本授業の意義など、授業の進め方 など
②10月8日(木)	○キャリアについての考え方 など
③10月15日(木)	○友永 隆浩氏(前三井物産戦略研究所 取締役 副社長代行) ◇経済学部卒
④10月22日(木)	○辻 英之氏(NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター代表理事・泰阜村総合戦略推進官・青森大学特任教授) ◇教育学部卒
⑤10月29日(木)	○高野 文彰氏(高野ランドスケーププランニング株式会社) ◇農学部卒 [新渡戸]
⑥11月5日(木)	○日野 峰子氏(会議通訳者) ◇文学部卒 [新渡戸]
⑦11月12日(木)	○村山 和佳氏(株式会社ズコーシャ 技術部設計二課 課長) ◇農学部卒
⑧11月19日(木)	○工藤 文肅氏(双日株式会社 北海道支店長) ◇工学部卒 [新渡戸]
【冬ターム】	
⑨11月26日(木)	○本授業の意義など、授業の進め方 など
⑩12月3日(木)	○井上 治氏(牛島総合法律事務所 弁護士) ◇法学部卒
⑪12月10日(木)	○井上 哲二氏(NHKテクノロジーズ札幌総支社メディア事業本部シニア・カメラマン) ◇文学部卒
⑫12月17日(木)	○永坂 章氏(森永乳業株式会社 松本工場長) ◇水産学部卒
⑬12月24日(木)	○安本佳緒里氏(東芝デバイス&ストレージ株式会社・エキスパート) ◇理学部卒
⑭1月7日(木)	○二階堂華那氏(農林水産省経営局農地政策課) ◇農学部卒
⑮1月14日(木)	○三村 直己氏(ウィンボンド・エレクトロニクス ゼネラルマネージャー) ◇理学部卒 [新渡戸]
⑯1月21日(木)	○最終まとめ

※ [新渡戸] は新渡戸カレッジ フェローまたはメンター

「全学インターンシップ成果発表共有会」開催される

去る10月30日(金)に「全学インターンシップ成果発表共有会」が、高等教育推進機構高等教育研究部とキャリアセンターの主催により学生37名、企業・団体等関係者8社12名の参加がありました。

この成果発表共有会は毎年インターンシップ終了後の学生に、その成果を振り返り、他の学生とその成果を共有し、今後の学生生活やキャリア形成に役立てるために実施していますが、今年度は新型コロナウイルスの感染防止の観点からオンライン(同時配信方式)の実施となりました。

プログラムは表1のとおりですが、本年の成果発表共有会では、まず、今年の夏季休暇中にインターンシップに参加した学生の中から、堀尾健斗志さん(法学部3年:財務省北海道財務局)と青山悠人さん(大学院生命科学院修士1年:株式会社植物育種研究所)の2名に各10分程度の成果発表をしていた

できました。

その後、1グループあたり4～5名程度で9のグループに分かれて「どのようなインターンシップに参加したいか。インターンシップの期間・目的・特に入ってほしいプログラムなど、具体的な要素をプレゼンせよ」というテーマでグループワークを行いました。このグループワークでは、自分の参加したインターンシップをもう一度振り返り、その内容をグループ内で共有しながら意見の集約を図りました。

今年度の成果発表共有会はオンラインでの実施ということであり、十分なグループワークができるのかという不安がありましたが、対面で実施していた昨年度までと変わらず積極的なディスカッションを行っていました。また、企業・団体の関係者の皆様にもオンライン上ではありますが、自由に各グループのディスカッションの様子を見学していただきま

した。

そのうえで、各グループ2分という短い時間ながら全体での発表を実施しました。各グループの発表内容を集約すると、期間については、現状が適切という意見ともう少し長い方が良いという意見に分か

れました。内容については、「もう少し実務にかかわりたい」「社員とのディスカッションがあればよい」などの意見がありました。

(亀野 淳)

表1 全学インターンシップ成果発表共有会 プログラム

日 時：2020年10月30日（金）18：30～20：30	
実施方法：オンライン（同時配信方式）	
1. 開会挨拶	高等教育推進機構 准教授 亀野 淳
2. 内容説明	キャリアセンター インターンシップ・マネージャー 太田 順也
3. 成果発表	
① 堀尾健斗志（法学部3年）	インターンシップ先：財務省北海道財務局
② 青山 悠人（大学院生命科学院修士1年）	インターンシップ先：株式会社植物育種研究所
4. グループワーク	
テーマ：「どのようなインターンシップに参加したいか。インターンシップの期間・目的・特に入ってほしいプログラムなど、具体的な要素をプレゼンせよ」	
① グループ内でディスカッション（約30分）	
② 全体発表（各2分×9グループ）	
5. 来場企業・団体からのコメント	
6. 全体総括・コメント	高等教育推進機構 准教授 亀野 淳

(敬称略)

経済同友会と連携した長期インターンシッププログラムに参加した学生の成果発表会開催

2016年度より公益社団法人経済同友会が実施するインターンシップ事業に本学も参加していましたが、昨年度よりその事業を一層拡充するため、一般社団法人経済同友会インターンシップ推進協会が設立され、本学も同協会の会員となり、同インターンシップに参加しました。

2020年度は、本学からは計11社、11名の学生が参加予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、野村證券、日本航空、JR東日本、三井不動産、凸版印刷の5社5名のみがオンラインでのインターンシップ実施となり、その他の企業は中止となりました（表1～4）。

そして、その成果発表会を去る11月18日（水）に

高等教育推進機構高等教育研究部とキャリアセンターの主催によりオンライン形式で開催し、同インターンシップに参加した5名の学生の他、同インターンシップを主催した一般社団法人経済同友会インターンシップ推進協会の藤巻事務局長等や学生を受け入れていただいた企業の関係者4名、来年度に参加を希望する学部1年生11名の参加がありました。

本成果報告会では、同インターンシップに参加した学生が各10分程度、参加したインターンシッププログラムの内容、役立ったこと、今後の学生生活への活かし方などについて成果発表を行い、その発表に対して各5分程度の質疑応答を行いました。

(亀野 淳)

北海道大学における経済同友会版インターンシップの実施状況

表1 本学学生の参加状況

学年	2016	2017	2018	2019	2020	計
1年	2	1	0	1	0	4
2年	6	13	11	10	5	45
計	8	14	11	11	5	49

表2 本学学生が参加している企業と人数

	2016	2017	2018	2019	2020	計
野村證券	2	3	1	1	1	8
日本航空		1	1	1	1	4
JR東日本				1	1	2
三井不動産				1	1	2
凸版印刷					1	1
三井住友銀行	1	3	1	1		6
花王	1	1	2			4
JFEスチール	1	1	1			3
三菱ケミカル	1	1		1		3
第一生命		1	1	1		3
大林組		1	2			3
デュポン		1		1		2
コニカミノルタ			1	1		2
みずほ証券			1	1		2
富士ゼロックス	1					1
全日空				1		1
出光興産	1					1
日本板硝子		1				1
計	8	14	11	11	5	49

表3 本学学生が参加している企業と人数

	2016	2017	2018	2019	2020
学生申込人数（面接対象）	17	35	50	52	37
参 加	企 業 数	7	10	9	11
	決定人数	8	14	11	10
倍 率（学生ベース）	2.1	2.5	4.5	4.7	3.7

学生の選考は書類（志望動機等を記載したペーパー）と面接により決定
2020年は当初決定ベース

表4 スケジュール（2020年度）（すべてオンラインで実施）

時 期	内 容
5月25日（月）～	学生に対する説明
6月10日（水）～12日（金）	参加希望学生の募集
6月16日（火）～17日（水）	参加申込学生に対する選考（書類及び面接）
6月18日（木）	学生へ選考結果通知
7月14日（火）～	事前研修①
7月15日（水）～	事前研修②
7月下旬～8月上旬	個人面談（1人10分程度）
インターンシップ終了後2週間以内	成果レポートの提出
インターンシップ終了後1ヶ月程度	アンケートの提出
10月30日（金）	成果発表共有会（全体）の開催
11月18日（水）	経済同友会版インターンシップ成果報告会の開催
12月頃	成績評価

新任紹介 INTRODUCTION OF NEW STAFF

着任のご挨拶

国際教育研究部 講師 山畑 倫志

こんにちは、2020年9月から国際教育研究部に着任いたしました山畑倫志（やまはた ともゆき）と申します。北海道大学大学院文学研究科の出身で、中世インドのジャイナ教を専門としています。本機構では国際教育研究部において外国人受講生に対する日本語授業のコーディネート業務を主に行っております。

高等教育推進機構では2012年から2013年にかけてもラーニングサポートセンターの前身であったアカデミックサポートセンターで学習サポートの業務に携わっておりました。当時、前年度から始まったばかりであった総合入試を経て入学した学生たちは学習意欲に富み、個々の授業内容についてのみではなく、履修のシステムや将来の進路についても強い関心をもってセンターに来室していたことが強く記憶に残っております。彼らの意欲やそれを支える総合入試や全学教育の仕組みからは、よりよい大学教育を考える上で様々な示唆をいただきました。

また前職の北海道科学大学高等教育推進センターでは主に初年次学生の日本語文章作成教育を担当しておりました。大学に入学したばかりの学生は、まとまった量の文章を読み手にとってわかりやすく書くことに慣れていません。そのため、個別の専門科目とは別に文章の書き方を学ぶ機会を与える文章作成科目の設計などを担当しておりました。

最後に、国際教育研究部で今後行っていく日本語授業のコーディネート業務について簡単にご説明いたします。日本語授業は学部生、大学院生、研究生、教職員など多様な身分の方々が受講できます。そのために様々な科目がレベル別に開講されておりますが、多様な日本語授業のニーズに応え、またより効果的な教育を実施するためにも、今後ますます全学教育や各学部・大学院との連携が必要となってきます。高等教育推進機構の皆様には様々なご協力をお願いすることがあると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

新渡戸カレッジ教育研究部（大学院コース） 特任准教授 島田 和久

新渡戸カレッジ大学院コースに着任しました島田です。どうぞ宜しくお願い致します。北大着任以前は国際担当の教員として、留学協定校開拓・メンテナンス、交換留学プログラム、グローバル人材育成コース（学部生）、などに従事してまいりました。大学院生を対象としたグローバル・プログラムを担当するのは今回が初めてであり、将来への目標がより明確になった大学院生に対して教育できることに

やりがいを感じております。また、この仕事を通じて、新しい知識・経験・視点を得られることもとても楽しみにしております。

私は修士までは理系（地球科学）、PhDは文系（国際政治学）で、民間企業、官庁、国際機関などで勤務してまいりました。多様性を重視する新渡戸カレッジに微力ながら貢献できるよう、精進していく所存です。また、機構が開催するセミナーやイベン

トを通して皆様方と幅広く交流しながら仕事ができればいいなと思っております。

プライベートでは、自然の中に身を置くことが好きで、広大なキャンパスでたくさんの木々に囲まれて仕事ができる今の環境をととても嬉しく思っています。

す。

コロナ禍もあって機構の皆様方と直接お会いできる機会は少ないですが、キャンパスで見かけた際にはお声がけいただけますと幸いです。

どうぞ宜しくお願いいたします。

着任のご挨拶

オープンエデュケーションセンター

科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) 特任助教 小林 良彦

2020年9月1日付けで着任した小林良彦（こばやし よしひこ）と申します。

大学院時代の専攻は原子核物理で、新潟大学にて博士号を取得しました。その後は、九州大学基幹教育院でファカルティ・デベロップメント (FD) 担当の特任助教として働いていました。

大学院生の頃から、サイエンスカフェなどの科学技術コミュニケーション活動に取り組んでおり、D3の時には、CoSTEPのe-learningプログラムを受講していました。その受講から4年ほどの時を経て、今後はスタッフとして、またCoSTEPに関われることを大変嬉しく思っています。

「人生は何が起こるか分からない」という旨の言葉を良く耳にします。人生経験がまだ少ない僕にとっては、あまり実感のない言葉でした。しかし最近、少しずつですが、その言葉の意味を噛みしめる経験を積み始めています。

学部生の頃に考えていた予定では、今頃、僕は世界から注目される天才物理学者になっているはずで

した。そんな予定のことは露知らず、科学技術コミュニケーションの経験を積み、FDの仕事をして、今後は科学技術コミュニケーションの教育研究の仕事をするようになる、と人生は進んでいきました。

まだ数か月しか経っていませんが、CoSTEPにおける教育・研究・実践は、とてもやりがいのある仕事だと感じています。幸運にも、原子核物理の研究も続けられています。指導教員だった先生から「瓢箪から駒、ということもある」と言われたことを思い出します。

きっとこれからの人生も、何が起こるか分からないのだと思います。でも、瓢箪から駒、ということもある。だから、決して悲観的にならず、アクティブに、そして、誠実に、歩みを進めていきたいと思っています。それと、“Be gentleman”も忘れずに。

最後になりましたが、北海道大学高等教育推進機構で働く機会を与えて下さったことに深く感謝申し上げます。ここでたくさんの経験を積み、大きく成長したいと思っています。

日誌 EVENTS, August–November

8 月

3 日～11 日 (会議)

第 1 回新渡戸カレッジ評価委員会
(持ち回り)

7 日 (会議) 第 5 回新渡戸カレッジ執行部会 (オンライン実施)

7 日～13 日 (会議)

令和 2 年度第 3 回高等教育推進機構
運営委員会

20 日 (会議) 第 1 回高等教育推進機構総合教育委
員会学生専門委員会

23 日 (行事) 第112回サイエンス・カフェ札幌
オンライン in 函館
「地球を旅する元素のゆくえ～大気
と海、海と堆積物をめぐるヨウ素の
ナゾ～」

24 日 (研修) 働き方を変えるタイムマネジメント
研修

25 日 (会議) 令和 2 年度第 4 回高等教育推進機構
運営委員会(高等教育研修センター)

27 日 (会議) 令和 2 年度第 1 回大学院共通教育委
員会

28 日 (会議) 第108回教務委員会 (持ち回り)

8 日～11 日 (会議)

令和 2 年度第 5 回高等教育推進機構
運営委員会

11 日～15 日 (会議)

第 2 回新渡戸カレッジ運営会議学部
教育コース教務専門委員会 (持ち回
り)

14 日 (会議) 第 2 回総合教育委員会

15 日・18 日・24 日 (研修)

「withコロナ時代の大学教育をどう
創っていくか」(高等教育研修セン
ター)

17 日～25 日 (会議)

第 2 回新渡戸カレッジ評価委員会
(持ち回り)

18 日 (会議) クラス担任等連絡会 (配信)

18 日～9 月 30 日 (会議)

第 2 回クラス担任等連絡会

18 日～10 月 2 日 (行事)

学部・学科等移行ガイダンス

18 日～30 日 (会議)

第 2 回新渡戸カレッジ運営会議 (持
ち回り)

20 日 (行事) オープンキャンパス (オンライン開
催)

23 日～30 日 (会議)

第 3 回学生委員会 (持ち回り)

23 日～10 月 2 日 (行事)

学部・学科等紹介

24 日 (行事) 新渡戸カレッジ修了式 (大学院)

25 日 (会議) 第 3 回教育改革室会議 (オンライン
会議)

25 日～10 月 4 日 (行事)

「アノオンシツ」作品展示

26 日・27 日 (行事)

セルフキャリア発展ゼミ：ワーク
ショップ (オンライン実施) (学部)

28 日・10 月 1 日 (行事)

新渡戸カレッジ基礎プログラム入校
説明会 (オンライン実施) (大学院)

9 月

9 月 1 日～7 日 (会議)

第 6 回新渡戸カレッジ執行部会 (持
ち回り)

4 日 (会議) 第 5 回新渡戸カレッジ定例会 (オン
ライン実施) (学部)

4 日～9 日 (会議)

第 2 回新渡戸カレッジ運営会議大学
院教育コース教務専門委員会 (持ち
回り)

4 日 (研修) 第 1 回「高等教育における障害のあ
る学生の支援に関する研修会」(高
等教育研修センター)

10月

- 1日 令和3年度学生募集要項(私費外国人留学生(学部)入試)公表
- 2日～8日 総合型選抜・国際総合入試・帰国子女入試インターネット出願登録期間
- 4日(行事) 北海道大学進学相談会(オンライン開催)
- 5日～18日(行事)
第2回対話プログラムzoom面談(学部)
- 9日(会議) 第7回新渡戸カレッジ執行部会
- 14日(行事) 新渡戸カレッジオナーズプログラム合格発表(大学院)
- 17日(行事) 新渡戸カレッジプレイスメントテスト(大学院)
- 17日～30日(行事)
北大CoSTEP「オープンウィーク」
- 17日～18日(行事)
NoMaps 2020コラボプログラム
「知る・観る・学ぶ!北海道のジオパーク～北の大地と生命の物語」
- 18日(行事) 北海道大学進学相談会(オンライン開催)
- 19日～30日(行事)
ソーシャル・デザイン実習展
- 19日(行事) 第113回サイエンス・カフェ札幌
オンライン
「みんなで考える持続可能なパートナーシップ～NEW NORMALにおける研究と地域～」
- 19日～21日(行事)
展示「当たり前を決まり方」
- 20日(行事) CAMP: CoSTEP Art Meets Project
「Withコロナ時代のアート展示」
- 21日(行事) 哲学対話カフェ
「死者をVR(ヴァーチャル・リアリティ)で再現することは是非か?」
- 22日(行事) Ecommu 3(エコミュ・スリー)
～野生動物問題の難しさや迷いを考えるワークショップ

23日～24日(行事)

考える部屋: コロナ, コミュニケーション, 次のステップ

- 25日(行事) 第114回サイエンス・カフェ札幌
オンライン
描け! ぼくらの「海の未来予想図」
- 28日(行事) 新渡戸カレッジ基礎プログラム合格発表(大学院)
- 28日(会議) 令和2年度第6回高等教育推進機構運営委員会
- 30日 令和3年度学生募集要項(一般選抜)公表
- 30日(会議) 第6回新渡戸カレッジ定例会(オンライン実施)(学部)

11月

- 11月2日(会議)
第2回全学教育委員会授業評価専門部会
- 4日(会議) 入学者選抜委員会
- 6日 総合型選抜・国際総合入試・帰国子女入試第1次選考結果発表
- 7日(行事) 秋入校新渡戸カレッジ入校オリエンテーション(オンライン実施)(大学院)
- 15日(行事) サイエンスアゴラ2020
弦巻楽団×北海道大学CoSTEP インヴィジブル・タッチ
- 16日(行事) 特別講演会オンデマンド(我々の快適生活は、途上国の犠牲の上に成り立っているのか)(学部)
- 20日～22日(行事)
弦巻楽団×北海道大学CoSTEP インヴィジブル・タッチ公演
- 22日 総合型選抜・国際総合入試・帰国子女入試第2次選考日
- 27日(会議) 第7回新渡戸カレッジ定例会(オンライン予定)(学部)

行事予定 SCHEDULE, January-March

◆1月

- 5 (火) 授業再開
- 15 (金) 大学入学共通テスト【第1日程】準備(休講)
- 16 (土)～17 (日)
大学入学共通テスト
- 20 (水) 水曜日の授業終了日
- 21 (木) 木曜日の授業終了日
- 26 (火) 火曜日の授業終了日
- 27 (水) 初習外国語統一試験日(通常授業は休講)
- 28 (木) 月曜の授業を行う日(木曜の授業は行わない)
- 29 (金) 大学入学共通テスト【第2日程】準備(休講)

◆2月

- 1 (月) 月曜日の授業終了日
- 2 (火) 金曜の授業を行う日(火曜の授業は行わない)
(第2学期授業終了日)
- 3 (水)～5 (金)
対面期末試験期間

- 8 (月) 学部・学科等移行ガイダンス
- 9 (火) 学部・学科等紹介
- 15 (月) 全学教育科目成績Web上公開
- 15 (月)～16 (火)
全学教育科目成績確認及び成績評価に関する申立て期間
- 25 (木)～26 (金)
一般入試個別学力検査等(前期日程)

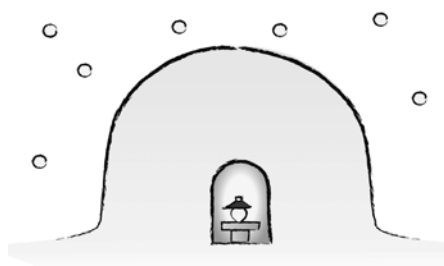
◆3月

- 1 (月) 正午
全学教育科目成績確定
- 1 (月) 午後～
第1年次進級判定
- 1 (月) 午後
学部・学科等移行手続き
- ～3/22 (月)(予定)
(第1回志望調査～各学部振り分け)
- 12 (金) 一般入試個別学力検査等(後期日程)



ニュースレター 2020, No.119 目次

(巻頭言) 本学教育体制の新たな前進に向けて 山口 淳二 1	経済同友会と連携した長期インターンシップ プログラムに参加した学生の成果発表会開催 ... 7
1年生, 3年生の自習時間 —「令和元年度授業アンケート」と「2019年度学生 アンケート」の結果より— 3	新任紹介 9
特別講義 「大学と社会—先輩からの熱いメッセージ—」を開講 —12人の卒業生が後輩に熱弁— 5	日誌 11 行事予定 13
「全学インターンシップ成果発表共有会」 開催される 6	目次・編集後記 14



編集後記

2020年も大晦日が近づいてきました。コロナ禍の影響からか、今年度のニュースレターは例年に比べて記事の数とページ数が減っているように思います。大学のイベントは中止・延期となるか、オンラインでの開催を余儀なくされている状況です。2021年は、ワクチンの開発が進み、新しい生活様式が社会全般に浸透・定着することにより、完全ではないにせよ前年よりかは不安なく研究・教育活動に従事することができるようになることを切に願っています。その際は、奮って記事をご投稿ください。それではよいお年をお迎えください。
(ラジオヘッド)

ニュースレター

(北海道大学高等教育推進機構広報誌)
通算 第119号

発行日： 2020年12月28日
発行元： 北海道大学高等教育推進機構
〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目
編集委員：◎細川敏幸・鈴木誠・飯田直弘・岩間徳兼
ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話 (011)706-7514, FAX (011)706-7521
インターネットホームページ：
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>